

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴオ]

9

SEPTEMBER
2008

CONTENTS

- ミト・デラルコ 第11回演奏会 1
- P-プロッ 鍵盤ハーモニカ演奏会 2
- ラデク・バボラークと仲間たち 3
- SELF PORTRAIT
城戸範子・城戸春子・植村理一 弦楽トリオ 4
- 最近の公演から 5
- インフォメーション 6



写真左：ラデク・バボラーク
写真右：鍵盤ハーモニカ・オーケストラ P-プロッ
写真下：ミト・デラルコ

ロマン派—ミト・デラルコの新しい挑戦。

● 9/7(日) ミト・デラルコ 第11回演奏会

2007年7月の第10回演奏会ではハイドン、トマジーニ、ベートーヴェンの書いた3曲の弦楽四重奏曲に、充実した成果を聴かせたミト・デラルコ。第11回演奏会は、そんな彼らが踏み出す新しい一歩となる演奏会です。

プログラムは、シューベルトの弦楽四重奏曲2曲(第12番 ハ短調 D.703(断章) および第13番 イ短調 D.804(ロザムンデ))、そしてその間にはさまれたメンデルスゾーンの(第2番 イ短調 作品13)の3曲。いずれも、ミト・デラルコにとって初のレパートリーとなります。

しかし「新しい挑戦」と書いたのは、単に初のレパートリーだからではありません。すでにお気づきの方もいらっしゃると思いますが、これはミト・デラルコにとって「初の全曲ロマン派作品によるプログラム」なのです。もちろん、2005年の第8回演奏会でゲストにエマニュエル・バルサのチェロを迎え、シューベルトの大曲(弦楽五重奏曲 ハ長調 D.956)を演奏していることをご記憶の方も多いかと思いますが、このときはポッケリーニ作品とのカップリングで、「全曲ロマン派」のプログラムは今回が初めてです。

まず、フランツ・シューベルト(1797~1828)。彼を古典派の最後に位置づける見方もありますが、歌曲における繊細かつ広大な感情表現、器楽曲においてしばしば形式を超えてあふれだす主情性などから、ロマン派の最初の一人とするのも決して間違っていないでしょう。

シューベルトは弦楽四重奏曲を、未完成のものも

含めて15曲残しています。数からいえば先輩ベートーヴェンの16曲に匹敵しますが、現在演奏会のレパートリーとして確実に定着している作品となると、ほぼ最後の4曲に限られます。1816年までに書かれた11曲の弦楽四重奏曲は、そのうち8曲までが彼の家での音楽仲間との合奏を企図して書かれた、「家庭用音楽」でした。一方(第8番)〈第9番〉(第11番)はより本格的な作品として書かれていますが(2曲は有名なヘルメスベルガー四重奏団が初演)、これも再評価はこれからというところでしょう。しかしやむを得ません。3年以上の沈黙を経て1820年に書かれた〈断章〉(完成した第1楽章と第2楽章の断片のみが残されているため、この名があります)の飛躍が、大きいからです。数年後の〈死と乙女〉を予感させる不穏で劇的な表情や、大胆な転調、構想の大きさと緻密さ。それに続く楽章をシューベルトは完成させることはできませんでしたが、有名な〈未完成〉交響曲と並ぶ、シューベルトの「未完成の傑作」に数えるべき作品です。そしてその苦闘は、上述の〈死と乙女〉に先だって1824年に書かれた今回の演奏曲〈ロザムンデ〉に結実します。〈死と乙女〉がベートーヴェンにも匹敵する劇的構成と激しさを備えた作品であるのに対し、〈ロザムンデ〉を満たすのは歌と抒情。冒頭楽章の主題が現れるだけで聴き手は「ああ、シューベルト!」とため息をつかすにはいられませんし、曲の呼び名の元となった劇音楽〈ロザムンデ〉間奏曲の旋律が主題に用いられる第2楽章の、静かな感情の高まりは実に印象的です。「ロマン派」シューベルトの、

器楽における真の開花を告げる傑作のひとつだと言えることができるでしょう。

一方、フェーリクス・メンデルスゾーン(1809~47)も、シューベルト同様、早熟な天才であり、恵まれた環境の中、幼少期から完成度の高い作品を多数書いていました。弦楽四重奏曲も14歳の時のしっかりした習作が残されていますが、今回演奏される〈第2番〉は、作品番号こそ後になるものの、〈第1番 変ホ長調 作品12〉に2年先立つ1827年に書かれた、最初の本格的な弦楽四重奏曲です。彼がモデルにしたのはベートーヴェン後期の四重奏曲で、冒頭に奏される動機が最後に帰ってくる、ユニークな構成をとっています。しかしその動機が「蔦のからまる壁のそばのあずま屋で、あなたが私を待っているって本当?」と歌う彼自身の歌曲からとられているのが、なんともロマンティックではありませんか。もしかしたらここには、10代のメンデルスゾーンの、ひそかなロマンスが託されているのかもしれない。第3楽章の、メンデルスゾーンお得意の妖精のようなスケルツォも、忘れがたい魅力を放ちます。

1999年9月、ミト・デラルコは第1回演奏会のアンコールで、メンデルスゾーンの〈第1番〉から「カンツォネッタ」を奏しました。あれから9年。前述したシューベルトの大曲への挑戦を経て、オリジナル楽器演奏による四重奏団として、ついに「全曲ロマン派プログラム」に取り組むその瞬間を、どうぞお聴き逃しなく。なお、所沢市民文化センターMUSEにて9月5日(金)同内容の館外公演を行います。お問い合わせはTEL.04-2998-7777(ミュージックチケットカウンター)まで。 《矢澤



鍵盤ハーモニカ・オーケストラ P-ブロッ

世界で唯一のプロフェッショナル鍵ハモ楽団・P-ブロッの演奏会。鍵ハモをもってホールに集まれ!!

●9/21 P-ブロッ 鍵盤ハーモニカ演奏会

作曲家の野村 誠さんの呼びかけで結成された、世界初のプロフェッショナルの鍵盤ハーモニカ楽団が、P-ブロッです。鍵盤ハーモニカ(略して「鍵ハモ」)は、水戸でも小学校の音楽の授業に取り入れられている、ポピュラーな楽器です。P-ブロッの演奏会では、ソプラノ、アルト、バスの3種類の鍵ハモが使用されます。オリジナル曲に加え、アニメ・ソングや童謡からクラシック、現代音楽まで幅広いレパートリーをもち、鍵ハモの魅力を存分に伝えてくれる彼らのステージを、お楽しみいただきたいと思います。当日は、客席の皆さんにも演奏に参加していただくコーナーもご用意していますので、ぜひ鍵ハモをご持参ください!

さらに、演奏会では、8~9月にかけて実施される野村 誠さんのファミリー・ワークショップ『いいかも、鍵ハモ!』で参加者皆で作ったオリジナル曲の発表も行われます。

以下、P-ブロッのメンバーの野村 誠さん、林 加奈さん、吉森 信さん、鈴木 潤さんへのインタビューを掲載します。どうぞご覧ください。 《中村》

—— 鍵盤ハーモニカの魅力を教えてください。

吉森:どこにでも持ち運べるところがいい。

林:吹奏楽器で2つ以上の音が出せる数少ない楽器の1つですね。あと、見た目が可愛い。値段が安い(笑)。

野村:ピアノは音が持続しないで、減衰していきますよね。でも、鍵ハモ(鍵盤ハーモニカ)の場合は、音を持続させた上に、息遣い次第で、クレッシェンドさえもさせることができます。

そして、ピアノのように和音も弾ける一方で、吹奏楽器として、単音でクラリネットやサクソフォンのように演奏することもできます。

鈴木:打楽器的な要素もありますね。バスの鍵ハモについて言えば、ベースを担当する楽器で、電気を使わないで、これほど歯切れのよいベースラインを出せる楽器というのは、本当に少ないと思います。

—— 鍵盤ハーモニカのアンサンブルというのは、どのような面白さがありますか?

野村:音の溶け合い具合が独特だと思います。アンサンブルになった時にできる響きが、僕は好きです。実は、鍵ハモはピッチがかなり微妙な楽器です。息の強さによってリードのピッチがかなり変動します。しかも、僅かな気温の差など色々な影響を受ける楽器なので、アンサンブルで和音が重なった時に、例えば少しくなったりする響きになったりすると、その場、その時でない、どのような響きになるのが分からないところがあります。逆に言うと、息の強さなどを調節しながら、現場で響きを創っていくことになります。

林:5人で合奏していて、役割を固定しないで済むので、時にメロディを弾き、時に内声部やベースをやるというように、色々なパートを自由に往き来する楽しさがあります。

吉森:特にこの2人(野村さんとご自身を指差して)は、人がいないところへ、いないところへとよく動いていきますね(笑)。

野村:楽器の組合せも固定していないので、ソプラノ、アルト、バスの3種類の鍵ハモの色々な組み合わせが考えられるという面白さもあります。

—— P-ブロッの活動を通してどのようなことを目指していますか?

林:P-ブロッは、メンバーそれぞれの固有の想いの集合体として成り立っていると思います。

野村:目指していることは、漠然としているかもしれませんが、自由になっていくことだと思っています。もちろん、必要とされることとして技術的に上手になるとか洗練されるとかということはあるのかもしれません。しかし、それ以上に思うのは、自分達が作った音楽に縛られたり、その他の様々なことに縛られたりしながら、それでもそれを越えていくような音楽を生み出していきたいということです。

鈴木:P-ブロッを結成する前の時期に、野村がよく路上で(鍵盤ハーモニカを)吹いていたんですよ。〈サザエさん〉とかをひたすら2時間演奏し続けたり……(笑)。それで一緒に吹いたりしていると、サラリーマンが寄ってきて愚痴を言ったり、雀荘のおばちゃんが包みにお金をくるんで道路の斜め向こうから投げってくれたり、楽しいことがいっぱいあ

りました。そして今でも、あの時抱いていた気持ちと変わりはなく、P-ブロッを知らない人が、聴くために立ち止まってくれたり、お金を投げ込んでくれたりするような、そういうグループになりたいと、ずっと思っています。

—— 9月21日の演奏会で演奏される曲目について、教えてください。

野村:今年1年間水戸芸術館では、ベートーヴェンに焦点を当てた演奏会をされているということなので、しばさんが編曲した〈ピアノ・ソナタ『熱情』〉を入れました。足踏みしたりします。脳天気というかユーモアのあるベートーヴェンと言えるかもしれません。

〈ニュー・シネマ・パラダイス〉(編曲:野村 誠)はどういう曲だと思う?

鈴木:原曲は本当にいい曲です。鍵ハモのアカペラ的な響きを楽しんでいただける作品だと思います。

野村:ケージの〈クアドリペ〉(しばてつ編曲)は、もともと弦楽四重奏の曲で、たぶん各楽器がノン・ヴィブラートで演奏することになっていて、素朴な響きを持っています。そういう観点からすると、この曲はひょっとしたら鍵ハモでの演奏の方がふさわしいのではないかと考えています。

〈神戸のホケット〉(野村誠作曲)は、P-ブロッを結成した時から演奏している曲です。原曲(註*)は、イギリスで初演していて、3本のフルートから始まる曲として書きました。その後、日本に戻ってきてから鍵ハモ用の曲にしましたが、今はどう考えても鍵ハモのための作品だと思っています。

林:〈サザエさん〉メドレーは、先ほどの話にもあった、P-ブロッを結成する前に、路上でやっていた時の代表的な曲で、P-ブロッの原点のひとつにある作品です。路上で知らない人が立ち止まってくれりような、あの頃の演奏の雰囲気が出せるといいなと思っています。

野村:それと、客席の皆さんにも鍵盤ハーモニカを持ってきてもらって、一緒に演奏していただくステージも考えていますので、楽しみにしてください。



写真:8月2日(土)に行われた、野村誠のファミリー・ワークショップ《いいカモ、鍵ハモ!!》より



写真:ラデク・バボラーク

——最後に水戸のお客さんに向けてメッセージをお願いします。

野村:今回は盛りだくさんのコンサートですね。客席の皆さんにも鍵ハモを持ってきていただき、ワークショップで作った曲も発表するし、プログラムもベートーヴェンもあって、サザエさんもあって、P-プロットのオリジナルもあってというように、色々な曲を入れています。その盛りだくさんの中から、その人なりの、それぞれの楽しみ方を見つけて

いただけるようなコンサートになったらいいなと思っています。

—— どうもありがとうございました。

※水戸芸術館のホームページで、本インタビューの完全版を掲載しています。

註*

阪神・淡路大震災の発生時にイギリス・ヨークに滞在していた野村さんは、神戸で被災した人達のためのコンサートを思い立ちました。ヨーク大学の音楽学部の学生や現地の中学生達と演奏をして、その様子は電話を通じてFM神戸で生放送され、さらにイギリスBBCラジオでも紹介されました。その時に作曲されたのが、〈神戸のホケッ卜〉の原曲です。

当代随一のホルン奏者バボラークが、信頼する仲間たちとともに奏でる稀有の室内楽

● 9/26 (金) ラデク・バボラークと仲間たち

vivo 読者である皆さんの多くは、きっと世界最高と評されるホルン奏者のラデク・バボラークの怪物ぶり!? をよくご存じのことと思います。彼は、水戸芸術館専属の水戸室内管弦楽団(MCO)のメンバーであり、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者であり、ソリストとしても室内楽奏者としても世界中から絶賛を浴び続けている存在です。他のホルン奏者の演奏からは決して聴くことができない、限りなく繊細で柔らかな音色が、彼の唇から奇跡のように生み出されます。

vivo 8月号のMCOのヨーロッパ公演のレポートでも触れていますが、バボラークこそが、去る6月のMCOのヨーロッパ公演で、病気のために指揮できなくなった小澤征爾音楽顧問に代わり、MCOの屋台骨を支え、演奏会を大成功に導いた立役者のひとりでした。モーツァルトの〈ホルン協奏曲 第4番〉では独奏者を務めながら指揮者にかわりオーケストラをリードしました。小澤氏不在でも、指揮者無しという形でも、ヨーロッパ公演を実施しようと、MCOのメンバー達は話し合い、決意しました。しかし、その時間問題となったのは、予定していた細川俊夫の〈月夜の蓮〉の演奏で、この作品は複雑なテクスチャをもつ現代曲であり、指揮者無しの演奏は不可能であると考えられました。メンバー達が思案に暮れているところに、自分ならこの作品の指揮が出来ると名乗りを挙げ、見事にその役割を果たしたのが、バボラークです。こうして彼は、MCOメンバーの一員としてオーケストラの演奏に参加する一方で、独奏者、指揮者としてオーケス

トラをリードする役割も果たし、ヨーロッパ公演の成功に大きく貢献してくれました。

さて、9月に行われる公演は、バボラークが信頼する演奏家がヨーロッパ各地から集結する室内楽の演奏会です。バボラークと共にステージに登場するのは、元ミュンヘン・フィルのコンサートマスターを務めたロレンツ・ナストゥリカ(第1ヴァイオリン)、チェコ・フィルに在籍するアイーダ・シャブオヴァ(第2ヴァイオリン)、ベルリン・フィルのソロ奏者であるヴィルフリート・シュトレーレ(ヴィオラ)、ウェスト＝イースタン・ディヴァン・オーケストラに在籍するハナ・バボラーク＝シャブオヴァ(チェロ)、チェコ・フィルの首席奏者であるヤン・ヴォボジル(第2ホルン)の5名です。

本演奏会は、今年水戸芸術館でベートーヴェン(1770-1827)の作品を紹介するシリーズ「ベートーヴェンは生きている」の第2回目として実施し、同作曲家の〈六重奏曲 変ホ長調 作品81b〉を取り上げます。この曲は、デビューして間もない25歳の若きベートーヴェンが手がけた、2本のホルンが弦楽四重奏と対比させられながら協奏曲のように活躍する、澁刺とした作品です。

他の演奏会を紹介しましょう。今回のプログラムの中で最も古い作品が、テレマン(1681-1767)の〈2つのホルンのための協奏曲 変ホ長調〉です。先述のベートーヴェン作品と同じく2本のホルンが弦楽四重奏をバックに活躍するバロック・スタイルの協奏曲です。続いて演奏されるのはツェムリンスキー(1871-1942)の〈狩の組曲〉です。ツェムリン

スキーはマーラーやシェーンベルクなどとも親交を結んだウィーンの作曲家です。本作品は〈2つのホルンとピアノのための狩の音楽〉が原曲で、バボラークがホルンと弦楽四重奏用に編曲したものが演奏されます。モーツァルト(1756-1791)作品からは、〈音楽の冗談〉が取り上げられます。この作品の作曲の意図については諸説ありますが、自分の技量をわきまえずに交響曲の作曲ができるとうぬばれている自称作曲家の創作上の失敗を、モーツァルトが皮肉のために書かれたのではないかと考えられています。後半の最初の曲はレイハ(1770-1836)の〈三重奏曲〉です。レイハは、バボラークと同じチェコ出身の作曲家で、フランスやドイツで活躍、管楽器のための作品を数多く残していて、ベートーヴェンとは同年生まれで友人付き合いをしています。〈三重奏曲〉は、2本のホルンとチェロのために書かれた作品です。そして、最後のベートーヴェン作品の前に置かれたのが現代作曲家クーツィール(1911-2006)の〈ワーグナーの主題による幻想曲〉です。クーツィールは、20世紀の金管アンサンブル作品に関しては、第一人者と呼ぶにふさわしい数多くの優れた作品を残したオランダの作曲家です。〈ワーグナーの主題による幻想曲〉は、ホルン1本と弦楽四重奏のために書かれた作品です。

現代最高のホルン奏者ラデク・バボラークが信頼する仲間たちとともに紡ぎ上げる、演奏機会の少ない貴重な演目が並べられた、夢のような室内楽の夕べを、どうぞお楽しみください。 《中村》



写真:城戸範子・城戸春子・植村理一 弦楽トリオ

SELF

PORTRAIT

親密な弦楽アンサンブルによる
意欲的なプログラム。

■9/15(月・祝) アンサンブルの愉しみ ～ヴァイオリン(城戸範子)、ヴィオ ラ(植村理一)、チェロ(城戸春子) による弦楽の響きと調和の世界～

芸術館では、2回目の「アンサンブルの愉しみ」のコンサートです。今回は、ソナタを中心にピアノとのデュオでした。そのうち1曲、ラヴェル作曲「ヴァイオリンとチェロのためのソナタ」を演奏。娘との初の共演でした。今回は、その続きのような、弦楽の魅力に迫ります。4本の弦から華麗な音を紡ぎ出す弦楽器。それぞれ大きさも音色も異なるヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの共演は、ふだんかな

か聴く機会も少ない事もあり、それぞれの弦楽器の特徴を生かしつつ、いろいろな重ね合わせた弦楽の響きによる弦楽二重奏、三重奏のアンサンブルを楽しんで頂きたいと思います。

昨年、ヴィオラの植村理一氏を迎え、娘のチェロとでバッハの鍵盤楽器のための作品〈ゴルトベルク変奏曲〉を抜粋ですが弦楽トリオで演奏する機会があり、感銘をうけました。バッハの晩年の大作で、テーマのアリアのバスがさまざまに変形されながら30の変奏が繰り広げられるすばらしい作品です。

近年、さまざまな形での編曲が登場していますが、今回は、その作品に新しい光をあてたシトコヴェツキの編曲による弦楽三重奏版で全曲演奏します。鍵盤楽器と一味違う弦楽トリオの織物の響きで調和の世界を築きあげ、バッハの偉大さ、無限の可能性を感じとって頂けたら幸いです。当時、バッハは、不眠症を患っていたカイザーリング伯爵から、眠れない夜を慰めてくれるようなクラヴィーア曲を依頼され、この作品を書きました。この名曲

は、現代の私たちにも語りかけ、心を癒し、楽しませてくれる事でしょう。

ヴァイオリンとヴィオラで演奏する二重奏曲は、モーツァルトのソナタです。この組み合わせによるものは2曲しかなく、その1曲ですが、華やかな掛け合いの楽しい、魅力ある曲です。

ヴァイオリンとチェロの二重奏曲は、コダーイの作品です。コダーイは20世紀のハンガリー音楽に燦たる業績を残した大作曲家で、彼自身ピアノの他に、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの演奏の名手でもありました。今回演奏するこの曲も、純音楽的表現の中にハンガリーの民族的音楽の性格を色濃く残し、深遠な響きを織りなします。

3つのスタイルで演奏して、弦楽器の魅力余す所なく伝え「アンサンブルの愉しみ」のひとつきを皆様と一緒に分かちあいたいと思います。どうぞお楽しみにお越し下さい。 城戸範子



*nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろんなところへnettamaします。

うたと弦楽四重奏

いやあ、一年のご無沙汰です。この欄の存在すら忘れられているのではと。最近のvivoは通常記事でみっちりのヴォリュームだし、この欄むきのネタは担当Yが自分のブログで書いてしまうからなあ。

と言っているうちに字数が減っていくので本題。弦楽四重奏曲というジャンルはしばしば「究極の絶対音楽」的な言われ方をして、抽象美の極致みたいな印象を受ける方もいるかもしれないが、そうだろうか。それが本来、四声部による生き生きとした対話の音楽であることは強調されねばならないが、今回ミト・デラルコが演奏するメンデルスゾーン(弦楽四重奏曲 第2番)が、自身の歌曲の旋律を基にしていることから、ひとつ思いついた。歌曲など、「うた」を基に

した弦楽四重奏曲には、どんなものがあるだろう? そういう弦楽四重奏曲の存在は、弦楽四重奏曲のイメージを、もっと柔らかいものにしてもらえるかもしれない。

探してみると、けっこうある。ハイドンには自作(皇帝賛歌)の旋律を第2主題の変奏曲主題に用いた(皇帝)がある。モーツァルトは意外に思いつかないが、ベートーヴェンの(ラズモフスキー)第1番と第2番は、依頼主のロシア貴族を意識してか、ロシア民謡を主題としている。歌曲王シューベルトには、自作歌曲をやはり第2楽章の変奏曲主題とした(死と乙女)が。スメタナの第1番と第2番は、自作オペラのアリアの旋律の転用が指摘される。ポロディン:(第1番)第2楽章にはロシア民謡(ウロビヨフの丘)が用

いられる。チャイコフスキー:(第1番)の有名な第2楽章(アンダンテ・カンタービレ)の主題も民謡。ドヴォルジャークには自作歌曲をそのまま弦楽四重奏に編曲した(糸杉)が。グリーグの(ト短調)第3楽章主題は自作歌曲(吟遊詩人の歌)に基づく、という具合で国民楽派強し。20世紀に入ると面白いことに独唱(つまり「うた」そのもの)と弦楽四重奏を組み合わせた作品が目立つ。レスピーギ:(夕暮れ)、シェーンベルク:(第2番)、ベルク:(抒情組曲)のオリジナル版など。この3曲がどれも、愛の苦悩を題材としているのは見逃せない。引用と暗喩の大家ショスタコーヴィチの15曲も、解き明かされることを待っている。うたと弦楽四重奏曲の関係、まだまだ深く知る余地がありそうだ。

最近の公演から

JUNE
JULY



1



2



3



4



5



6

ぐるっぺ・ローゼン ～オペラと出逢う日～ (6月22日)

和泉純子さん・清水知子さん・紙谷弘子さん・久保田尚子さん・青地英幸さん・清水良一さんという、その多くが水戸芸術館「茨城の名手・名歌手たち」出身者であったり、水戸芸術館や茨城と深い関わりを持っていたりする6人の歌手によって結成された「ぐるっぺ・ローゼン」。松本康子さんのピアノと共に、〈魔笛〉〈ジャンニ・スキッキ〉〈蝶々夫人〉〈トゥーランドット〉〈ホフマン物語〉〈ファウスト〉〈カルメン〉といった名作オペラのさわりを楽しんでいただくというぜいたくなコンサート。各メンバーの熱唱はもちろん、曲によっては舞台仕立てのものも含み、熱演と楽しいMCに客席は大いに沸いた。そして、寺門芳子さん指揮する水戸二高合唱団の清冽な歌声が舞台をいっそう盛り上げた。アンコールはヴェルディ〈椿姫〉およびヨハン・シュトラウス2世〈こうもり〉にそれぞれ含まれる〈乾杯の歌〉。

《矢澤》

アンケートから●同じ県民としてこんなすばらしい歌手の皆さんが活躍しているのをほこらしく思いました(水戸市:Y.T.さん)●オペラ入門としてとてもよかったと思います。歌声もすばらしかったですが、ピアノもとてもすばらしかったです(水戸市:J.S.さん)●コーラスも良かったです。彼女たちにも、良い刺激になったことと思います(Y.K.さん)●名手・名歌手たちに出演していらっしゃる方のご成長をみて、これからも応援していきたいと思ってをります(水戸市:C.T.さん)

水戸芸術館・高校生音楽講座2008【第2期】 第2回(6月27日)

第2回目の講座は『ベートーヴェンを追いかける2:怒濤編』。今回は、中期「傑作の森」時代のベートーヴェンを取り上げた。作品は、前半は〈英雄交響曲〉をテーマに、ベートーヴェンの劇的な変貌を検証。後半は中期の作曲理念の〈運命交響曲〉と、そこから異なる方向に向かいつつある〈第8交響曲〉を取り上げて考えた。受講生はMCO第73回定期演奏会にも数多く来場し、準・メルクル指揮する〈田園交響曲〉に耳を傾けていた。講座の詳細い内容については担当者のブログ <http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa> 「高校生音楽講座2008」の欄をご覧ください。

《矢澤》

水戸室内管弦楽団第73回定期演奏会 (7月5、6日)

小澤征爾音楽顧問の突然の降板という緊急事態を乗り越え、広上淳一氏を迎えた第72回定期、そして指揮者無しで臨んだヨーロッパ公演(第72回定期の最終日も指揮者無し)。それから十数日

後、そのヨーロッパ公演の熱い余韻を残したまま、MCO(水戸室内管弦楽団)のメンバーは再び水戸芸術館に集結した。

この第73回定期演奏会はMCOの未来に向けられた公演と言えそうだ。指揮を務めたのは、MCOとは3度目の共演となる準・メルクル。そして、今回は、練達のMCOメンバーに混ざり、次代を担う才能溢れる若い演奏家たちがエキストラとして参加した。また、先のツアーでも大きな役割を果たした、豊嶋泰嗣が全曲を通してコンサート・マスターを務めた。

前半のプログラムは、R.シュトラウスの2作品。独立した23の弦パート(10ヴァイオリン、5ヴィオラ、5チェロ、3コントラバス)から成る〈メタモルフォーゼン〉では、メルクルは演奏者たちの技量を十分に引き出して、重厚で精緻なアンサンブルを実現させた。〈クラリネットとファゴットのドゥエット・コンチェルティーノ〉では、メルクルが音楽監督を務めるリヨン国立管弦楽団の首席奏者のフランソワ・ソゾー(クラリネット)とオリヴィエ・マツ(ファゴット)が独奏を務め、オーケストラとの伸びやかで親密な掛け合いが展開された。そして、後半はベートーヴェンの〈交響曲 第6番『田園』〉。このあまりにも有名な曲をMCOが取り上げるのは今回が初めてであり、機が熟するのを待っての演奏であった。ここで成し遂げられたしなやかで生気溢れる感動的な演奏こそ、メルクルとMCOとのコラボレーションがいかに大きな可能性を秘めているのかということの最も明確な証しであろう。

《中村》

アンケートから●準・メルクル氏のMCOとの〈田園〉の演奏は、「柔らかく強い」音楽で、聴き慣れた曲ですが、惹きこまれました。(日立市:M.N.さん)●R.シュトラウスの〈メタモルフォーゼン〉での弦の音色の素晴らしさに涙が出そうでした。遠くから来たかひがありました。(横浜市:M.S.さん)●本日も元気をいただきました。クラリネットとファゴットのソリストのお二人は、演奏、人柄ともすばらしい。またいらっやっして欲しいです。(T.S.さん)●大好きなベートーヴェンの〈田園〉は、今まで聴いた中で最高の演奏でした。第2楽章を聴いているうちに、幸せな気持ちに包まれました。(那珂市:Y.I.さん)

1～2.ぐるっぺ・ローゼン

3～6.水戸室内管弦楽団 第73回定期演奏会

information

■チケットに関するお問い合わせ

…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000
営業時間/9:30～18:00(月曜休館)

■公演内容や企画に関するお問い合わせ

…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118

■【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

■茨城放送「タッチ・ミー・イン・ザ・モーニング」内「タッチ・ザ・クラシック」
毎週水曜日・朝6:50頃から約10分間
水戸周辺 1197KHz、土浦周辺 1458KHz

チケット・インフォメーション

〈8月30日(土)発売分〉

◎水戸室内管弦楽団第74回定期演奏会
11/8(土)18:30開演、11/9(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥5,500 A席¥4,500 B席¥3,500
ペア券:S席¥10,000 A席¥8,000(各日100枚限定 ※水戸芸術館のみの
取り扱いです。)

※水戸室内管弦楽団第74回定期演奏会には、8月26日より友の会維持会員、8月27日より友の
会一般会員の先行電話予約がありますので、8月30日の一般発売の時点で券種によっては、お
客様のご希望に添えない場合があります。ご了承ください。

〈9月18日(木)発売分〉

◎水戸芸術館友の会第52回鑑賞会
ホルン・室内楽の楽しみ ―水野信行と水戸の仲間たち―
2009年2/8(日)14:00開演
料金(全席指定):一般¥3,000 学生¥1,000 友の会一般会員¥2,000

※ホルン・室内楽の楽しみ ―水野信行と水戸の仲間たち― には、9月13日より友の会維持
会員、9月14日より友の会一般会員の先行電話予約がありますので、9月18日の一般発売の時
点で券種によっては、お客様のご希望に添えない場合があります。また、会員価格でのお求
めはお1人様1枚となります。ご了承ください。

これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし
中央…中央ブロック 左右…裏…左右ブロックおよびステージ裏 補助…補助席

◎ミト・デラルコ第11回演奏会……………9/7(日) 中央×、左右・裏○

◎アンサンブルの楽しみ

(城戸範子・城戸春子・植村理一 弦楽トリオ)……………9/15(月・祝) 自由席○

◎P-ブロッ 鍵盤ハーモニカ演奏会……………9/21(日) 自由席○

◎ラデク・バボラークと仲間たち……………9/26(金) 中央×、左右・裏○

◎茨城の名手・名歌手たち 第19回……………10/4(土) 自由席○

◎ハーゲン弦楽四重奏団……………10/5(日) 中央×、左右・裏○

◎東京芸術大学同声会茨城支部演奏会……………10/13(月・祝) 自由席○

◎ソフィー・イエーツ チェンバロ・リサイタル……………10/18(土) 中央○、左右・裏○

◎豊田あい子 ピアノ・リサイタル……………10/26(日) 自由席○

※7/31(木)現在の状況です。

※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生
券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、
学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な9月のスケジュール

コンサートホールATM

■ミト・デラルコ 第11回演奏会
9/7(日)14:00開演 料金(全席指定):¥3,000

■水戸芸術館高校生音楽講座2008[第2期]
第3回「ベートーヴェンを追いかける3:超越篇」
9/12(金)17:00～19:00 参加費:1回¥200

■アンサンブルの楽しみ
～ヴァイオリン(城戸範子)、ヴィオラ(植村理一)、チェロ(城戸春子)による弦楽の
響きと調和の世界～
9/15(月・祝)14:00開演 料金(全席自由):¥3,000

■P-ブロッ 鍵盤ハーモニカ演奏会
9/21(日)14:00開演 料金(全席自由):小・中学生¥500 一般¥1,000

■ラデク・バボラークと仲間たち
9/26(金)18:30開演 料金(全席指定):¥3,000

エントランスホール

■パイプオルガン プロムナード・コンサート
9月:6日(土)、27日(土)、28日(日) 開演時間:12:00/13:30(2回公演)
入場無料 ※演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

■市民演劇学校公演『風に吹かれて』
9/6(土)19:00開演、9/7(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500

■第12回短編映像祭
□9/13(土)
A「TVの短編を追え!」14:00～
B「寛昌也短編特集」15:50～
C「シャーリー・テンプル・ジャポンpart3/part4」18:00～
□9/14(日)
D「afterworld[アフターワールド]」13:00～
E「アフタースクール」14:30～
F「ホフディラン劇場・アコースティックライブ&トーク」18:00～
料金(全席自由/入替制):プログラムA～E¥1,000 F¥1,500

□9/15(月・祝)
「コンペティション部門」11:30～ 料金(全席自由/1日券):¥1,200
「クロージングパーティー」20:30～ 料金:¥1,000 ※当日会場にて販売

■朗読劇『少年口伝隊一九四五』
9/21(日)17:00開演 料金(全席自由):一般¥1,500 学生¥1,000
チケット発売:8月31日(日)

現代美術センター

■ジュリアン・オビー
7/19(土)～10/5(日)9:30～18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 ただし9/15(月・祝)は開館、翌9/16(火)は休館。
料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

茨城の主な9月の演奏会 ※有料公演のみ

◆佐川文庫 TEL/029(309)5020

■小林美恵 ヴァイオリン・リサイタル
9/6(土)18:00開演

◆ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122

■ひたちなか市芸術祭 ひたちなか市民オーケストラ 第27回定期演奏会
9/21(日)14:00
(問)ひたちなか市民オーケストラ TEL/029(273)5506

◆日立シビックセンター TEL/0294(24)7200

■～日立出身の音楽家と子どもたちの交流～
古寺ななえ(ピアノ) ジブリ・ソングと思い出の歌 ―ゲスト:井上あずみ(歌)―
9/28(日)14:00開演

◆ギター文化館 TEL/0299(46)2457

■チャン・デゴン ギターリサイタル
9/7(日)15:00開演

■福田進一 ギターリサイタル
9/28(日)15:00開演

◆ノバホール TEL/029(852)5881

■つくばフィルハーモニー合唱団定期演奏会
9/13(土)18:00開演

■ふるさと太鼓創立32周年記念公演 つくば和太鼓フェスティバル
9/14(日)17:00開演

■ふれあいコンサート「トーナドーナの音楽会」
9/21(日)15:00開演

■寺井尚子(ジャズ・ヴァイオリン) コンサート
9/26(金)19:00開演

■第23回 国民文化祭・いばらき2008協賛事業
つくば学園オーケストラ第42回定期演奏会
9/28(日)14:00開演

◆結城市民文化センター・アクロス TEL/0296(33)2001

■鼓童 ONE EARTH TOUR 2008
9/13(土)18:30開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2008年9月発行 第135号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃
矢澤孝樹(編集長)

DTP/村田征司
印刷所/株式会社あけぼの印刷社

次号は…ハーゲンSQ、イエーツのチェンバロ、そして
MCOパロクの響宴。秋は実り多し。